



みんなの みんなによる みんなのためのクラス どこまで近づけた？



3月になりました。
このクラスで過ごすのも残りわずか、3年生は実質7日しかありません。※1・2年は14日
今日は、残り少なくなった時間を、あなたがどう使うかを、真剣に考えてみて欲しいと思います。これからあなたがこのクラスで、どんな気持ちで、何をして締めくくるのかは、あなた自身にとっても、あなたのクラスの人たちにとっても、大切なゴールでもあり、次のステージへの助走でもあるからです。

1,2年生の学年末テストがあった22日(水)の午後に3年生は学級委員さんたちの企画・進行で中学校生活最後の学年レクを楽しみました。

その様子を見学した私が、とても素晴らしいと感じたのは、すべて自分たちの手で進行している学級委員たちが、学年レクに向けて「全員が楽しむ」という目標を掲げて、3つものレクを考え、準備をしてきたということです。

3つものレクをしようと思えば、それだけ準備が大変になるのに、なぜ？

学年には、いろいろな人がいる。ドッチボールがとても苦手な人がいる。玉入れじゃ満足できない人がいる。クイズなら、安心して参加できる人もいる。…。中学校生活最後のレクを学年の全員が楽しむために、手間がかかっても、3つのレクを準備しようと考えたのだそうです。そんな学級委員さんたちの気持ちが、3年生のみんなに伝わったのだと思います。みんなが、笑顔で、楽しんでいる姿が印象に残る中学校生活の最後の学年レクでした。

学年、クラスにはいろいろな人がいる。あたりまえのことなのだけれど、そのことを本当に大切にするためには、手間のかかることもあります。でも、その手間を面倒だ、不必要だと切り捨ててしまわない人たちの、心の温かさがみんなが楽しいと思える学年、クラスをつくることを私も学ばせてもらいました。そしてこれはきっと、社会全体にも言えることだと思います。

なにが 君の しあわせ
なにをして よろこぶ
わからないまま おわる
そんなのはいやだ！
忘れないで 夢を
こぼさないで 涙
だから 君は 飛ぶんだ
どこまでも
そうだ おそれないで
みんなのために
愛と 勇気だけが ともだちさ
やなせたかし
アンパンマンのマーチより

小学6年のとき、お楽しみ会に何をやるか学級会が開かれ、多数決で「ドッチボール」に決まった。直後、担任から一言「多数の多数による多数のためのお楽しみ会」とリンカーンのように言われ「あれ？」と心がもやもやした。多数決は絶対的に公平な決め方だと思っていた。だが、その一言で「ドッチボールが苦手な人にとってはお楽しみ会ではない」と気づいた。そこで少数派に聞く「ボールに当たるのを怖い」「いつも狙われる」などの意見があった。それを改善すべく、軟らかいボールを使ったり、苦手な人を守ったりと工夫した。以来、多数少数関係なく皆の意見を聞きより良いものを作りたいと考えが変わった。そのことを思い出したのは…

まずは、体育館でクイズ大会

毎日選択型
-複数の種目

下二つを踏まえて

全員が楽しむ 目標

三年全体で団結し、己の個性を發揮して最高の学年をつくる 基礎



続いて変則ルールの玉入れ



最後は、白熱ドッチボール

3月14日(火)10時、3年生の旅立ちの時、卒業式の開式です

令和4年度卒業証書授与式は、上記日程で挙ります。保護者の方(各家庭2名以内)の入場は、9時以降にお願いいたします。当日は体温を記入した「入場者証」を持参のうえ、マスク着用など新型コロナウイルス感染症の感染防止の取組みへのご協力をお願いします。

★万一、学級閉鎖などの事情により式を延期する場合は、3月17日(金)午後1時に式を挙ります。

「黄色い補聴器は私の耳」妹の言葉で気づいた

中3スピーチ反響



「妹の言葉で自分の偏見に気づいた」という前橋真子さん（左）と妹の真紀さん＝山梨県南アルプス市、家族提供

難聴の妹の存在を口にす
るのをためらう自分がい
た。でも、妹の反論をき
かけに変化が訪れた。そん
な心の動きを紹介した中学
3年生のスピーチが多くの
人の胸に響いた。
山梨県南アルプス市に住
む中学3年の前橋真子さん

（15）の妹、中学1年の真紀
さん（13）は生まれつき難聴
だ。左耳に補聴器、右耳に
人工内耳をつける。発音は
うまくできない。明るく、
いつも元気だ。
小学生のころだった。
「妹、障がい者なのに元気
だね」という友人の何げな

一言が心に残った。
「障がいのある人が明る
いことは普通ではないの
か」と、妹を恥ずかしく思
う気持ちが芽生えた。心が
もやもやして、積極的に妹
のことを周囲に話さないよ
うになっていた。
昨年春、中学入学を控え
た真紀さんが補聴器を新調
することになった。真子さ
んも一緒に店に出向いた。
黄色の補聴器を選ぼうと
する真紀さん。「黒や茶な
ら髪の毛と同調して目立た
ない。恥ずかしい思いをし
なくてすむ」。姉として、
そう繰り返し諭した。
すると、反論された。
「誰になんと思われても、
これは私の耳なの。私は黄
色い補聴器の私を見てもら
いたい」

その言葉にハッとした。
「障がいにこだわっていた
のは私自身だった」。自ら
の「障がいフィルター」に
気づいた瞬間だった。
真子さんはその後、この
経験を1500字ほどにま
とめた。通っている同県北
杜市の甲陵中学校を通じて
「第44回少年の主張全国大
会」に応募した。

題は「あなたの声、心に
届け」。コロナ禍のため、
全国大会は動画によるスピ
ーチの審査だったが、約40
万人中で最優秀賞にあたる
内閣総理大臣賞に輝いた。
スピーチで真子さんは、
真紀さんが人工内耳の手術
を受けて、発声練習を繰り返
してきた歩みを振り返っ
た。「妹が笑顔を絶やさな
いのは、今までたくさん
努力をしてきたからだ」
真紀さんは補聴器をつけ
て、姉とは別の中学校に通
う。テニス部ではムードメ
ーカーとして仲間認めら
れていると人から聞いて、
「誇りだ」と思えるように
なった。
だから、スピーチでは力
を込めた。身近にハンディ
キャップのある人がいた
ら、「そのハンディという

フィルター越しではなく、
その人自身や心に寄り添っ
てほしい」。最後は手話を
交えて訴えた。「妹の耳
に、あなたの声は聞こえな
いかもれない。でも、あ
なたの気持ちは妹の心に確
実に届いている」
受賞は昨年11月、大会ホ
ームページの発表で知っ
た。最初にパソコンの画面
で見つけたのは真紀さんだ
った。「同じようなハンデ
イのある人にも届いてほし
い」と自分のことのように
喜んでくれた。受賞を受け
て真紀さんは「姉に刺激を
受けた。私も当事者とし
て、積極的に発信していき
たい」と話す。

真子さんは最近、「スピ
ーチを見て私も偏見に気づ
いた」「見方が変わった」
と学校で友人から声を掛け
られるようになった。「気
づきや自責の念など心の中
で起こった変化を精いっぱい
表現できた。最優秀賞は
驚いたが、発表して本当に
良かった」と感じている。

（米沢信義）

私は、この記事を読んで、あらためて「障がい」とは一体何なのかということを考えました。

私が「障がい者」だと思っている人は、もともと自分で自分のことを、「障がい者」だと思っているわけではない。だとしたら、今の社会の状態の中で、生活していくうえで「生きにくさ（ハンディ）」がある人が、必要なサポートや手助け、配慮をうけられないことが、「障害」なのでないかと思ったからです。「障がい者なのに元気だね」と見ている人と同じ心の「障がいフィルター」が、自分自身の中にはないかと、私も問われた気がします。目には見えないけれど、これも今の社会にある「障害」ですね。

「できないこと」も、「人と違うこと」も、自分も含めてみんなにあるはずなのに、どこかでラインを引いて、「障がい者フィルター」で人を見る。そんなことがなくなれば、社会が変わり、「障がい者」ということばも、必要でなくなるのではないかと、思います。

「黄色い補聴器の私を見てもらいたい」という真紀さんの、まっすぐな思いに触れ、「ありのままの自分を、隠さなくてはいけないと思わせるもの」を無くしたいと強く思いました。あなたはどうか？